

「我らの他力本願」

オリンパスというカメラの製造で有名な会社があります。オリンパスブランドのカメラといえば、キャノンやソニーに次ぐ知名度を誇っていますが、実は、オリンパスが最も得意としているのが、内視鏡とか顕微鏡などの医療・研究関連の機器だということを最近、知りました。あと、ボイスレコーダーも有名らしいです。カメラだけではない会社なんだと、今更ながら知ることができました。別に私はオリンパスの株を買っているわけではなく、宣伝広告をして株価操作をしたいわけではありません。このオリンパスという会社は、過去に大手新聞に載せた広告記事が原因で謝罪表明をしたということがありました。どういう内容の広告記事だったかという、このような文言が掲載されていました。

「三日坊主から抜けだそう、大樹の陰から抜けだそう、井の中から抜けだそう、無芸大食から抜けだそう、その場しのぎから抜けだそう、二番煎じから抜けだそう、箸にも棒にもから抜けだそう、他力本願から抜けだそう」

これら 8 つの「抜け出そう」という言葉は、一般的に見てよろしくない、つまらない状態からの脱却という意味で発信されています。下らない無価値で継続性のない状態から抜け出して、独創的で、自信にあふれ、誰の目にも素晴らしく見えるようになろうではないか、とそういうメッセージですね。人の向上心を煽って企業価値を高めようと目論む広告記事としては別に悪くないと思います。しかし、この広告記事を見て、仏教の浄土真宗の人たちは我慢できなかったのです。浄土真宗の人たちが問題としたのは、「他力本願から抜け出そう」という部分ですね。オリンパスの広告記事では、抜け出さねばならぬくらいに良くない状態という意味で「他力本願」という言葉が使

われていたことに、浄土真宗は抗議したわけです。

確かに「他力本願」という言葉には、自分は怠けつつ他人に依存してしまおうという意味もあるように理解できる感じがします。けれど、本来は「他力本願」とは、浄土真宗の教祖である親鸞の唱えた思想で、阿弥陀如来の力にすがって、全人類を仏の道へと招き入れようという意味なのだそうです。「他力」というのは、他人の力ではなく、阿弥陀如来、つまり仏の力であり、また「本願」というのは、仏道への帰依を願うことなのだ。なので、再びオリンパスの広告記事を考えてみますと、「他力本願から抜け出そう」という言葉は、「他力本願」という言葉を正しく理解する上では、仏の力による仏教への招きから抜け出そう、仏の導きを拒絶しよう、という反仏教的なものになってしまうわけです。まあ、キリストを信じる者である私達にとっては、それはもしかしたら両手をあげて賛同すべき、優良な広告記事なのかもしれませんが……。仏をイエスに、仏教をキリスト教に、仏教への招きを、キリスト教への招きという風に読み替えるなら、浄土真宗の方々の憤りや悲しさというものは十分に想像できます。まあ、ありそうもないキャッチコピーですが、信じるだけで全て上手く行くなんて安易な発想を貶すために、「信仰義認から抜け出そう」とか広告記事に出されたら、まあ、良い気はしないですよ。大切な信仰理解を馬鹿にされたという点に関しては、私達も同情をすべきだとは思いますが。

余談ですが、キリスト教に慣れ親しむ一部の外国の人たちは、仏教と言え、臨済宗や曹洞宗などに興味を持つんだそうです。臨済宗も曹洞宗も「禅」という一種独特な教えを持つ宗派です。福井県で有名な永平寺は曹洞宗の総本山にして、禅の道場という側面もあります。一方で、浄土宗とか浄土真宗、日蓮宗といった日本において多勢を占める宗派には、外国の方々は関心が薄いと言います。というのは、少々乱暴な言い方ではありますが、浄土宗や浄土真宗なら「南無阿弥陀仏」と唱えることで、日蓮宗なら「南無妙法蓮華経」と唱えることで永遠の極楽浄土への道が開かれると

言います。その信仰理解は、キリスト教を基調とする外国の人たちにとって、キリスト教の持つ信仰義認の考え方と非常によく似ているように見えるのだそうです。つまり、「主の御名によって祈ると救われる」というキリスト教の信仰理解と、「南無阿弥陀仏と唱えると救われる」という考え方はよく似ているから、珍しさが無いという。だから、よく似ているように見える浄土宗や、浄土真宗や、日蓮宗には新鮮な興味関心を持たないんだ、と言います。さらに余談を言えば、日蓮宗が掲げる「法華経」においては、人も動物も植物もみんな仏になれる性質を持っていて、この世界は仏の力で満ちていると言います。そして、「だから、私たちが生きているこの世界こそが、仏の世界なんだ」ということを説いています。これも、まるでルカによる福音書 17 章 20 節～21 節におけるイエス様の御言葉のようです。「神の国は、見える形では来ない、ここにある、あそこにあると言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と。そんなキリスト教と仏教の類似性が目立つ宗派もある一方で、曹洞宗や臨済宗という禅の文化を持つ宗派は、明らかに目に見えて、珍しく映るんだと思います。座禅を組んで瞑想し、姿勢が崩れたら、「警策」という棒で叩かれるという風景は、私達にも見覚えがあるかと思いますが、その風景が私達日本人にとっても、とても新鮮で興味深いように、こと外国の人たちにとっては、一度は体験してみたいひとつの宗教体験なのでしょう。だから、禅の宗派は、キリスト教圏の外国の人たちの心を掴むといわれています。

さて、話はそれでしたが、もとに戻りまして、「他力本願」とは、浄土真宗の開祖である親鸞の思想です。そして、キリスト教と浄土真宗とは、せいぜい似ているという程度のものですが、それでも、何かしら通じるころはあるのだと思います。それは、系統立てられて実証された神学や仏教学上の類似と言い切ることは、一介の牧師に過ぎない私にはできませんが、少なくとも個人の印象というレベルで、「なんか似ているなあ」と、そう感じさせる、共通項はあるかと思っています。キ

リスト教も、浄土真宗も、日常生活における人間の働きというものを尊重はしつつも、最終的には、神様あるいは仏による人知を超えた恩寵によってのみ、救いに与ることができる、という究極的な一致はあるのかなと思います。だから、「他力本願」という仏教用語は、きっと、私たちの信仰にも取り入れることのできる言葉だと、私は思います。今回の説教題で「我らの他力本願」としたのは、そういう意図からでした。キリスト教の教会の看板に「他力本願」と書くと、「あちゃー、この人はちゃんと言葉の意味を知らないみたいだね」と思われるかも知れないという心配もありましたが……。だから、頭に「我らの」とつけたつもりなんです。説教題に「他力本願」とつけたことで、敦賀教会が非難されるなら、それは私の責任なので、……。謝るしかできません。しかし、本当に私たちの信仰の形も、自分の力にのみ固執するのではなく、他の力、つまり神様とイエス様の助けを祈り求めるという姿勢が大切です。神様とイエス様という「他力」に望みを置き、そして、全世界に向けた福音宣教と十字架という贖いの出来事に救いを見出す「本願」を期待すること。他の宗教の言葉を勝手に借りて、再解釈するなら、きっとそういう風に言い換えることができるかと思っています。

取り上げるのが遅くなりましたが、「我らの他力本願」という信仰理解に立って、今回の短い聖書箇所にある、御言葉を読むと、そこに私たちは多くの福音を見つけるかと思っています。「アイネア、イエス・キリストがいやしてくださる。起きなさい。自分で床を整えなさい」。イエス様の一番弟子といわれるペトロさんでさえ、その癒しの業は、イエス・キリストの名によって行われる、というところに注目したいと思います。使徒言行録には、数々の癒しの奇跡物語が書かれています。それが史実なのか、どうかは別に大した問題ではありません。私たちにとって大事なものは、その全てにおいて、「癒しとは、使徒たちを通して実現されるイエス様の業」であるということです。今日の聖書箇所におけるペテロさんの癒しの奇跡は、まさにイエス様の名による「他力本願」な奇跡と

言って良いかと思えます。神様なしでは、イエス様なしでは、奇跡は起こりえない。たぶん、私たちのような普通の人間では、奇跡どころか日常生活さえ危ういのかも知れません。私たちの生活全般が、良くも悪くも「他力本願」です。車を運転する時も、私たちは私たちの能力以上のものに護られて、今日も事故なく怪我なく過ごしています。時々しでかす失敗が致命的にならず穩便に収まるのも、私たちの自力ではありません。犯した過ちが、うやむやの内に忘れられることも、白日の下に晒されないことも、きっと神様とイエス様の他力が働いているのでしょう。そうやって、私たちは赦され、認められ、受け入れられて生きています。そのようにして、神様とイエス様の優しさと赦しを受け入れて、自分ではどうすることもできない問題を神様とイエス様に委ねて生きるこそ、本当は何よりも大切なのでしょう。旧約聖書のエレミヤ書 17 章 14 節にある御言葉。「主よ、あなたがいやしてくださるなら、私はいやされます。あなたが救ってくださるなら、私は救われます。あなたをこそ、私は讃えます」。この御言葉においては、主の助けを求める先には、主への賛美の言葉が続きます。神様にとって、人の賛美の声ほど素晴らしいものはない、ということは、詩編 150 編を読んでもよくよくわかるかと思えますが、今回の聖書箇所においても、イエス様によって癒されたアイネアは、「すぐに起き上がった」と書かれています。この「すぐに」という表現の裏には、主に対するためらいのない信仰と服従という意味が込められています。そして、付け加えるなら、そのアイネアの信仰と服従の姿を見て、リダとシャロンに住む人々は主に立ち帰ったと書かれています。ペトロさんの他力本願から始まった癒しの奇跡は、癒されたアイネアの信仰と服従を通して、より多くの人々へと影響を広げていき、主を賛美する多くの声へと変わっていくのです。

無理のないうちは、「自力本願」でも良いかと思えます。自分の力を信じて、信じ抜いて、可能な限りの高みを目指すのは、善いことです。しかし、「我らの他力本願」には、私たち自身の力を

超えた、想像だにしない結果をもたらす可能性を秘めていると言えます。仕事にしても、奉仕にしても、信仰継承にしても。「自分で全部しないとダメだ」という束縛を解いた先に、案外、良い感じの結果が待っているのかも知れません。

これから毎日の生活の中で、「他力本願」という言葉に出会う時には、それを「他者依存の悲しい状態」と受け止めるのではなく、また、本家には悪いですが「阿弥陀如来の助け」と捉えるのではなく、私たちの主イエス・キリストによる奇跡に等しい出来事を期待するという、非常に前向きで希望に満ちた信仰の勧めであると、そう理解しても良いかと思います。神様の愛と力に寄り頼む今日からの一週間を過ごしたいと願います。お祈り致します。

神様。

今日も私たちの都合や思いを越えて、私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、ありがとうございます。あなたは、いつも私たちのことを御心に留め、最も良いと思われる方向へ導き、教えてください、私たちの喜びと幸いを守ってください。たとえ、病にある時も、ケガをした時も、障害を負った時、あなたは、必ず私たちに意味と目的と逃れの道を備えてくださいます。私たちは、私たちには克服できないことでも、あなたに祈ることで、あなたの御力を頼ることで、乗り越えていくことができると信じて、感謝致します。あなたという他力を信じて、救いや幸せという本願に達することができますように。私たちの日々を導き、喜びで満たしてください。私にはできないことでも、あなたならできると信じて。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

12月召天者を憶える祈り

詩編 33 編 12～15 節

いかに幸いなことか／主を神とする国／主が嗣業として選ばれた民は。主は天から見渡し／人の子らをひとりひとり御覧になり、御座を置かれた所から／地に住むすべての人に目を留められる。人の心をすべて造られた主は／彼らの業をことごとく見分けられる。

橋本よ志 はしもと よし (1971 年 12 月 13 日召天)

橋本久臣 はしもと ひさおみ (1986 年 12 月 13 日召天)

石山すゞの いしやま すずの (1993 年 12 月 13 日召天)

吉谷はつ よしたに はつ (2012 年 12 月 15 日召天)

橋本敏子 はしもと としこ (2011 年 12 月 16 日召天)

笹本房太郎 ささもと ふさたろう (1997 年 12 月 19 日召天)

片山朝子 かたやま あさこ (1996 年 12 月 19 日召天)

武長哲也 たけなが てつや (2022 年 12 月 20 日召天)

片山奥右衛門 かたやま おくうえもん (1987 年 12 月 21 日召天)

山登美代子 やまと みよこ (2009 年 12 月 22 日召天)

柴田はや しばた はや (1926 年 12 月 25 日召天)

上田敏夫 うえだ としお (2011 年 12 月 27 日召天)

菅野りう すがの りう (1950 年 12 月 28 日召天)

赤澤道子 あかさわ みちこ (2005 年 12 月 28 日召天)

神様。私たちは今、この地上における働きを全うし、あなたによって備えられた道のりを走り終えて、あなたの住まう天へと帰っていかれた敬愛すべき兄弟姉妹のことを覚えて祈りを合わせています。あなたは、ご自身のことを証しするために、主イエス・キリストをこの世へとお与えになり、そして、その後も、主に従う多くの方々を聖別し、教会を担う器として祝福してくださいました。私たちは、この敦賀教会を担い、その礎を確かなものとして組み上げてくださった信仰の先達に感謝の意を表します。また、あなたによって与えられた命を燃やし、人のために、社会のために尽くして来られた友人を心に留めて祈ります。どうか、世の終わりの時まで、この12月の召天者の方々の魂が、あなたによって守られ、その生涯の道のりに相応しい、十分な恵みと慈しみで満たされますように。天の上には永久の安らぎを、地の上に慰めと導きをお与えください。

この祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。